人気絶頂！今を時めくテノール、ヨナス・カウフマン主演
マルティン・チェック演出のバイエルン州立歌劇場《運命の力》

取材・文＝中 東生

アルヴァーロ役のヨナス・カウフマンとレオノーラ役のアニヤ・ハルテロス ©W.Hoesl

La Forza del Destino —Jonas Kaufmann in Bayerische Staatsoper

いままさに〝飛ぶ鳥を落とす勢い〟のテノール、ヨナス・カウフマンが5～6月にかけて日本を訪れ、待望のリサイタル・ツアーを行ったばかりだが、それに先駆け、5月にはバイエルン州立歌劇場《運命の力》で喝采を浴びた。そのステージの模様をお伝えしたい。

●

マルティン・クチェック演出の《運命の力》は、プログラムにちりばめられている現実のニュース写真からもわかるように、現代にも通用する運命の皮肉を描いている。

長髪で皮ジャン姿のカウフマンと時代遅れでコンサヴァティヴな紺のドレスのハルテロス、意図的に不釣り合いに描かれていると思われる「現代の黄金カップル」が大半の観客のお目当てであろうが、カラトラーヴァ侯爵とグァルディアーノ神父の二役を歌って健闘したヴィターリ・コヴァリョフ、カルロを歌ってカウフマンと対等に渡り合ったシモーネ・ピアッツォーラ、体当たりでプレツィオジッラを演じたナディア・クラステヴァ、そして唯一本場のヴェルディ歌唱を踏襲していたアンブロージョ・マエストリらも輝いていた。ソプラノドランマティコのレオノーラ役はハルテロスには重過ぎるためか、ヴェルディ特有のレガートが不足していたが、聴き心地のよい歌手陣であった。

この演出は序曲が初めに来る通常の形なので、冒頭の運命を暗示する3音が無造作に奏でられたのには不満だったが、その後は納得のいく演奏を聴かせてくれた。アッシャー・フィッシュの指揮は力み過ぎる割にクレッシェンドでの楽想の爆発力に欠けているが、突然美しいピアニッシモに落としてからのクレッシェンドは巧みで、劇的な音楽作りに成功していた。コンマスの力量が発揮された間奏も美しかった。

出演者たちは、終演後もなかなか帰らない観客に何度も舞台上へ呼び戻されていたが、直前の5月5日に老舗百貨店「Beck」の音楽フロアで行われたサイン会でも一人ひとりに丁寧に応対していたカウフマンが、聴衆と温かい関係を築き上げているのが印象的であった。

ミュンヘンのCDショップでサイン会に臨むカウフマン ©Vornberger Alfons